

麻疹(はしか)の予防接種を受けましょう

平成19年の5月から6月にかけて、高校生・大学生を中心として全国的に麻疹(はしか)が流行しました。今後、このような流行を防ぐため、時限措置として、13歳と18歳になる年度のそれぞれ1年間を対象に、麻疹の予防接種を実施することになりました。

大人になって発症すると恐ろしい麻疹(はしか)

「はしか」とも呼ばれている「麻疹」は、咳(せき)やくしゃみなどによる麻疹ウイルスの空気感染・飛沫(ひまつ)感染、接触感染により発症する急性の感染症です。麻疹の免疫をもっていない人が感染すると90%以上が発症し、一度感染して発症すると一生免疫が持続するといわれています。毎年、春から初夏にかけて流行することが多い病気です。

麻疹は、ウイルス感染後、潜伏期間が約10日から12日間続きます。その後、熱、咳、鼻水、目やになど、風邪と同じ症状が始められます。症状がはじめてか

ら、38度前後の熱が3日から4日続き、いったん熱は1度程度下がりますが、再び39度から40度の高熱と首筋や顔などに赤い発疹(ほっしん)が出ます。高熱は3日から4日で下がり、咳も軽くなってきたり、発疹も次第に消えてきますが、しばらくは色素沈着が残ります。麻疹にかかった人の約30%は、気管支炎、肺炎、中耳炎、クループ症候群、心筋炎、脳炎などの合併症を起し、なかには死亡する場合があります。麻疹が治ってから10年ほどして、10万人に1人の程度で、亜急性硬化性全脳炎(SSPE)という重い脳炎を起すこともあります。また、妊娠中に感染すると、流産や早産などを引き起こす可能性があります。

若年層にも麻疹が流行

麻疹は、子ども時代に感染し、発症して免疫ができるのが一般的でした。しかし、近年は10代や20代の若者を中心に麻疹が流行することが多く、平成19年の4月から7月にかけては、

大学や高校などの学校施設で計263校が休校になりました。これは、昔に比べて麻疹の流行が減ったことで、10歳以上になるまで麻疹ワクチンを受けていなくても、麻疹にかからずにすんでいた人が増えているのが原因の一つです。また、麻疹ウイルスに感染する機会が激減していることにより、小児のときに予防接種をしても、ワクチン接種後数年以上経過すると自然感染のブースター効果(免疫増強効果)を受ける機会が減っていることから、もっていた麻疹に対する免疫力が弱くなってしまう、感染して発病してしまうことも原因といえます。

接種対象は、13歳と18歳になる年度の1年間

平成24年度までに麻疹を排除することを目標とした「麻疹排除計画案」がまとめられました。また、当該計画を基に、感染症法および予防接種法の規定に基づき総合的に予防接種を進める必要がある疾病として、

昨年12月に「麻疹に関する特定感染症予防指針」(平成19年厚生労働省告示第442号)が公布されました。麻疹ワクチンで重要なのは2回接種することです。麻疹は、1回の予防接種で95%以上の人が免疫を獲得しますが、残りの5%未満の人は免疫を獲得することができません。また、今の10代の人では、自然感染のブースター効果を受ける機会が少なく、予防接種を1回受けた人の20%程度は免疫が下がっていて発症を予防する効果が落ちていることが分かっています。2回の接種で100%近くまでに有効率を高めることが期待できます。そして、風しん対策も先天性風しん症候群の予防という意味でとても重要なので、使うワクチンは麻疹風しん混合ワクチンが原則です。

平成18年、予防接種施行令が一部改正され、1歳と小学校入学前の2回、麻疹と風しんのワクチン接種が定期的な予防接種に導入されました。しかし、平成20年度で小学校3年生以上の人たちは法改正前に小学校に入

学し、接種の対象から外れてしまっているため、麻疹ワクチンと風しんワクチンを1回しか受けていない、もしくは1度も受けていない人が多数います。これらの人を麻疹と風しんから守り、麻疹を流行させず、先天性風しん症候群の発生を予防するために、平成20年4月から5年間の期限付きで、1回しか予防接種を受けていないか、麻疹または風しんにかかったことがない中学1年生と高校3年生に相当する年齢を対象に、ワクチンの接種をすることになりました。これにより、5年後には、22歳以下の人は2回接種を受けていることになりました。

厚生労働省 健康局 総務課